

どっぽ もり 独歩の森 ～ナラ枯れから 再生へ～

NPO法人市民まちづくり会議・むさしの
武蔵野の森を育てる会

1. 独歩の森とは？

独歩の森は境4丁目にあり、市立 ^{さかいさんやりよくち} 境山野緑地の約半分を占めています。明治の文豪・国木田独歩の作品『武蔵野』にゆかりがあるので、このように呼ばれています。

独歩の森は江戸時代からつづく雑木林で、およそ80年前までは農家の方が薪をつくったり落ち葉を集めて腐葉土にしたりして利用していました。その後は雑木林としての利用が無くなったので、今では全体が高木化しています。

主な木は、コナラ、クヌギ、イヌシデ、アカシデ、ムクノキ、シラカシ、ケヤキなどです。



独歩の森(2019年7月)

2. ナラ枯れの衝撃

2020年、その独歩の森を「ナラ枯れ」がむしばみ始めました。これは、カシノナガキクイムシ（以下、カシナガ）という米粒ほどの小さな虫がコナラなどに大量に入り込み、ナラ菌を木の中で繁殖させて水の吸い上げを阻害することにより、木が枯れてしまう現象です。ナラ枯れによって、独歩の森では30本余りあったコナラが2021年夏には16本も枯れてしまいました。

コナラが次々と枯れていきました。 ⇨





カシナガが大量に入るので、フラス(木くず)が根元にたまります。



落ち葉の季節でもないのに、冬枯れのような光景です(独歩の森の西側から撮影)。

3. 地域フォーラムの開催

「これは大変だ」ということで、地元の西部コミセンでは同年10～11月に4回連続の地域フォーラム「独歩の森のナラ枯れを考える」を開催し、対策をみんなで考えました。第1回「独歩の森の現状を見る(現地見学会)」、第2回「ナラ枯れについて知る(専門家による講演会)」、第3回「みんなで情報共有(ワークショップ)」、第4回「パネルディスカッションと会場を交えた意見交換会」を行い、第4回には緑のまち推進課の課長さんにもご登壇いただきました。

4. 雑木林の再生への着手

そして2022年2月、武蔵野市の事業としてナラ枯れがひどかった区域(約400㎡)の木をまとめて伐採し、そのあとに70人の市民がコナラとクヌギのドングリ(673個)を播きました。こうして、市民参加で雑木林の再生が始まりました。



伐採した区域に70人の市民が結集し、みんなでドングリを播きました。



ドングリを播いたあと、静まり返った再生地。地中では発芽への準備が着々と...

明るくなった再生地には、多様な植物が元気に生えてきて、昆虫や鳥などの生き物も集まってきました。生物多様性の貴重な空間の誕生です！



高木を伐採したら明るくなったので、早速タチツボスミレが开花しました。



モズのつがいがやってきて、エサとなる虫を探しています。

そして、同年春には播いたドングリの約5割が発芽し、その後も順調に育っています。元々は生い茂る高木が林床（林の地表の部分）への日照を遮っていたため、地面は草も生えない裸地でしたが、今では草と多くの幼木で覆われています。そこには、バッタをはじめさまざまな生き物が棲むようになりました。



コナラの幼木



クヌギの幼木



草と幼木で覆われた再生地。



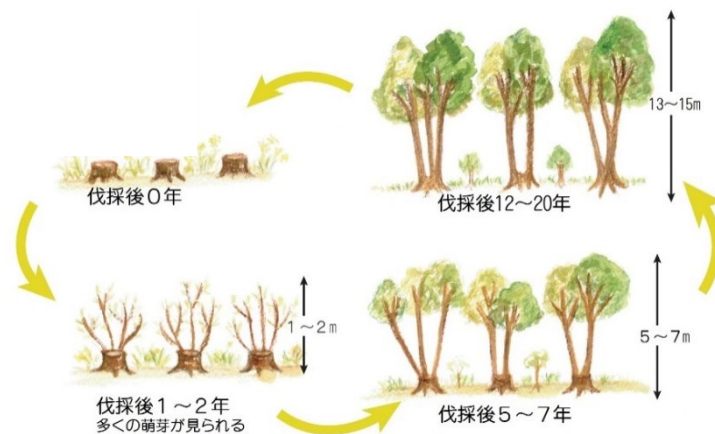
左が元からある高木林(裸地状態)、右が緑豊かな再生地。

5. 持続可能な雑木林にするために

今後、この再生地にはコナラ、クヌギを中心とする多様な植物が育ち、雑木林としての生態系が根付いていくでしょう。しかし、そのまま放置して高木化が進むと、またナラ枯れに襲われるかもしれません。なぜなら、カシナガは太いコナラやクヌギを好むからです。

実は、昔の雑木林は10～20年のサイクルで伐採して薪や炭を確保していました。切り株から芽（萌芽）が出て、また元の状態に戻るのです。萌芽を育てて林を更新していくことから、このような方法を萌芽更新と呼びます。ひどく高木化（大木化）する前に伐採するので、カシナガはほとんどいなかったそうです。

現代にくらす私たちは、こうした先人の知恵に学びながら持続可能な雑木林を実現し、次世代へとつないでいくことが大切ではないでしょうか。



萌芽更新のサイクル（環境省『里地里山保全再生計画作成の手引き』（平成20年）より）

【参考】ナラ枯れに関する基本知識は、独立行政法人 森林総合研究所 関西支所『ナラ枯れの被害をどう減らすか—里山林を守るために—』に分かりやすくまとまっています。

https://www.ffpri.affrc.go.jp/fsm/research/pubs/documents/nara-fsm_201202.pdf

⇒こちらから閲覧できます。

